

中年期女性の親子関係

— サンドイッチ世代における2つの親子関係の規定要因 —

梁 明 玉¹ 久 和 佐枝子¹

中年期女性(317人)を対象に、2つの親子関係(母親との関係と長子との関係)に及ぼす影響要因について検討した。分析の結果、長子との親子関係には、長子の同別居や性別などが影響しており、母親との親子関係には、母親の介護有無や接触頻度などが影響を及ぼしていることが示された。この結果には、長子との関係には長子に関する人口統計学的要因が、母親との関係には母親に関する人口統計学的要因がそれぞれ影響力を持っており、2つの親子関係についての世代間の影響は見られなく、別個の2つの親子関係が存在していることが示唆された。

問題と目的

年齢を重視したライフサイクル論から見ると(Levinson, 1986)、中年期は、生物学的、社会的、心理学的にも、また家族発達の側面からも、大きな変化が生じる時期である。中年期の女性は、子どもたちは青年期に達し、やがて就職、結婚という独立期を迎えると同時に両親の老いや介護、死など両世代の親子間の大きな変化を経験することになる。

中年期は、自分の子どもに対する援助や面倒をかかえながら、老親の扶養や介護の問題に直面する世代でもある。Zal(1992)は、子世代に対しても親世代に対しても、責任と役割が同時に要求される負担感の大きい板挟みの中年世代をサンドイッチ世代と指した。Troll(1979)らは世代の概念について、世代には、個人の発達レベルとしての世代、家族リネージ(リネージlineage:単系集団で各メンバーの間の系譜関係が具体的にたどれるもの)における世代、社会システム内の年齢階層あるいはコーホートとしての世代があることを示した。また、家族リネージにおける世代は、家族内の親・子・孫という地位と役割にもとづくもので、暦年齢に左右されない。青年期の子と中年の親、中年の子と老年期の親は、親子の発達にかかわらず、親世代・子世代と分類された。

特に、家庭内の世代間関係で最も興味深いのは、青

年期、中年期、老年期の三世代である(岡本, 1994b; Santrock, 1985; Schlesinger, 1989)と言われている。しかし、三世代を同時に扱った研究はほとんどない。中年期の親と青年期の子どもの対象とした研究や老年期の親と中年期の子どもの対象とした研究が主である。Silverberg(1987)らは、10~15歳の青年期の子どもの持つ129組の両親を対象とした研究で、父親は息子の、母親は娘の情緒的自律が進むにしたがって、中年期のアイデンティティの問い直しが深まることを見出した。また、この時期に特有の親子の葛藤によって、母親の幸福感が低下する。また、この傾向は仕事もち、それに強く関与している母親でも同じであることを示した(Silverberg & Steinberg, 1990)。

しかし、中年期女性は仕事役割が大きくなるにつれて、子どもとの分離にあまり衝撃を受けなくなる(Rossi, 1980)という見解もある。41~60歳の中年期の女性を対象とした研究(清水, 2004)では、フルタイムで勤務する人のほうが子どもの巣立ちに対してアイデンティティの転換に積極的である結果が示された。

これらの結果は、中年期の親は子どもが青年期を迎えることによって自己の問い直しを促されるが、子育ての主たる責任を担っている母親は、子どもたちをめぐる葛藤や議論に日常的に参加する機会が多いため、自分の人生を子どもとの関係の中で考える傾向が強く、それだけに心の動揺が大きいのではないかと推測

キーワード：中年期女性、サンドイッチ世代、親子関係

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

される。子育てへの関与が深いほど、親子のライフサイクル段階で相互に激しくぶつかりあったり、困難と感じたりするのかもしれない。

中年期女性にとって子どもの巣立ちは、親子の関係性を見直すきっかけとなるのは確かであろう。子どもの離家、結婚という出来事を経験により、親子関係が変化していくのもこの中年期のライフイベントの一つであると考えられる。Fischer (1981) は、娘の結婚と出産により、母娘の情緒的関係のみならず、接触や援助交換における相互作用のパターンが変化することを明らかにし、母と娘の居住近接性にかかわらず、娘が子どもをもつことで接触が促進されることを示した。また、北村 (2001) の母娘関係の研究でも、娘の結婚や出産という出来事により、母娘間の接触や相互の援助が増し、より親密な親子関係になることが示されていた。

中年期女性は、子育てが一段落して、今度は自分の趣味や仕事にエネルギーを注ごうと計画しているが、今度は老いた親の介護の問題が待っている。親の介護は女性に任されることが多いため、仕事や自分の時間を持ちたいという気持ちと介護の必要とのほぎまで、葛藤や罪悪感を体験する女性が多い (Bergquist et al., 1993; Schlesinger, 1989)。この時期の親と子の関係は、「親から子」へとなされてきた援助関係が逆転し、「成人子から老親」へと役割が交代する時期を迎える。Bengtson (1979) らは、中年の子は老親に対してより高いレベルの援助を提供していることを報告した。また、Lawton (1994) らは、老いた母親は中年の娘との接触頻度が多いほど情緒的親密性を強く感じるという結果を見出していた。しかし、同居子との濃密な接触が必ずしも高い情緒的親密性と結びついていないことも指摘されている (河合・下仲, 1990)。河合 (1992) らの高齢者とのサポートの授受に関する研究は、子どもから老親へは情緒的サポートが、逆に老親から子どもへは物理的なサポートが提供されることを示した。また、横山ら (1994) の研究では、老親子間の物理的な距離が近いほど、同伴行動や手段的サポートの授受が成り立ちやすいことが示された。

これらの先行研究は、老親に対して、子どもからの一方的なサポートを提供するのではなく、相互的なサポートの授受に焦点を当てており、また、老親と子どもとの関係性においては、その子どもの続柄や同別居の有無、接触頻度などが重要な影響要因であることが示されていた。

このように、中年期の女性にとっては、サンドイッ

チ世代として、自分が親としての役割があると同時に、子どもとしての役割が要求される時期でもある。しかし、上下2つの親子関係を持つ中年期女性の特徴を視野に入れた研究はまれである。

これらの観点を踏まえて、中年期女性をサンドイッチ世代として、中年期の女性の視点から、子どもとの関係と親との関係を同時に検討することを試みた。しかし、世代が違う2つの親子関係を直接に比較検討することは難しい。

中年期女性の親子関係に関する研究 (久和・梁、印刷中) では、「中年期女性の持つ2つの親子関係は、対応する項目で構成された2つのバージョン (親との関係バージョンと、子どもとの関係バージョン) を持つ尺度で測定でき、その2つの親子関係の構造は同じである」という仮説を立て、2つのバージョンを持つ尺度開発を試みた。分析の結果、2つの親子関係の因子構造については、3因子が抽出され、ほぼ同一の項目が集まり、2つの親子関係の構造がほぼ同じであることが示された。これらの結果から、因子を変数化した際にはダイレクトな比較検討が可能であることが考えられる。

そこで、本研究では、中年期女性の親子関係に関する研究 (久和・梁、印刷中) に基づき、同じ因子構造をもつそれぞれの3因子を合成変数化し、中年期女性の2つの親子関係におよぼす影響要因を明らかにすることを目的とした。

方法

調査対象者：関東地方のO市に居住する中年女性 (45~64歳) 317名であった。ランダムに選出した1800人に対して、返信用封筒とともに自記式調査票を郵送したところ884人から回答を得た。そのうち、母親、長子 (11歳以上) 両方からの回答を寄せた317人を分析対象とした。

調査方法：郵送法による自記式質問紙調査。

調査期間：2003年11月から2004年2月であった。

調査内容：長子との関係、親との関係、フェイスシートなどからなる。

1) フェイスシートには、調査対象者の年齢、職業の有無、学歴、母親の年齢、接触頻度、介護の有無、同別居の有無、長子の年齢、性別、同別居の有無、接触頻度などが含まれている。

調査対象者の年齢は45~64歳まで分布しており、平均年齢は52.2歳であった。長子の年齢は11~41歳で、

そのうち21～30歳の割合が53.9%を占め、最も多かった。長子の結婚状況は、未婚が74.1%を占めた。同別居率については、同居が55.5%を占め、別居率をやや上回っていた。母親の年齢は65～99歳まで分布しており、平均年齢は79.8歳であった。そのうち80代が47.4%で最も高い率を占めた。介護の状況は介護が必要でない割合が8割を占め、介護が必要な割合をはるかに上回っていた。同別居率については、同居率は13.2%にすぎなかった(表1)。

2) 親子関係に関しては、中年期女性をサンドイッチ世代として自分の親との関係と自分の子どもとの関係という上下2つの親子関係からそれぞれ回答が求められるように設定し、母親との関係バージョンと、長子との関係バージョンそれぞれ14項目ずつを作成した。質問紙については、以下の3つの尺度を参照した。まず、中高生の子どもの持つ母親を対象に、自分の親役割について自己評価を求める尺度として親役割診断尺度(谷井・上地, 1993)、次に小学校4～6年生を対象とした子どもバージョンと、その親を対象とした親バージョンに関するFurman(1991)のParent-Child Relationship Questionnaire(以下PCRQ)、そして青年の心理的離乳の観点から、親子関係を尋ねる落合・佐藤(1996)である。邦訳の際には上記の3つの尺度のうち、落合・佐藤の親子関係に関する指標を参考とした。なお、評定尺度は、1)「よく当てはまる」から5)「全然当てはまらない」という5件法であった。

結果

1. 合成変数の作成

親子関係に関する尺度について、長子との関係バージョン14項目と、母親との関係バージョン14項目について、それぞれSEMによる確認的因子分析を行った。その結果、それぞれ3因子構造が確認された。適合度指標となるGFI, AGFIについては、長子との関係バージョンがGFI=0.90, AGFI=0.84であり、母親バージョンがGFI=0.92, AGFI=0.87という値を得て、モデルの適合度の高さが示された。それぞれの因子を構成する項目から、長子との関係バージョンと母親との関係バージョン双方に因子1は見守り、因子2はサポートを与える、因子3はサポートを求めると命名した。これらの結果をもとに各因子の構成項目を単純加算平均して合成変数を作成した。各合成変数の平均値・標準偏差・ α 係数を表2に記す(α 係数については「長子にサポートを与える」の数値が.606と低めであ

るが、久和らの研究におけるSEMの適合度指標が十分な値を示したことから、変数化に耐えられると判断した)。

2. 中年期女性の親子関係の規定要因

中年期女性を取り巻く親子関係、すなわち、自分の母親との関係と自分の長子との関係についての規定要因を調べるため、母親との関係、長子との関係に関する変数を目的変数、長子との同別居の有無、長子の性別、母親年齢、母親との接触頻度、母親の介護の有無

表1. 調査対象者の基本属性 単位: % n: 人数

項目	対象(n=317)	
年齢	45～49(n=108)	34.1%
	50～54(n=112)	35.3%
	55～59(n=64)	20.2%
	60～64(n=33)	10.4%
学歴	中学校卒(n=30)	9.5%
	高校卒(n=150)	47.3%
	短大卒(n=86)	27.1%
	大学卒(n=45)	14.2%
	その他(n=6)	1.9%
職業	職業有り(n=208)	65.6%
	職業無し(n=109)	34.4%
介護の有無	介護有り(n=249)	78.5%
	介護無し(n=68)	21.5%
母同別居	同居(n=42)	13.2%
	別居(n=275)	86.8%
母接触頻度	毎日(n=56)	17.7%
	週に数回(n=38)	12.0%
	週に1回(n=44)	13.9%
	月に1～数回(n=122)	38.5%
	年に1回以下(n=57)	18%
長子の性別	男子(n=152)	47.9%
	女子(n=164)	51.7%
長子同別居	同居(n=176)	55.5%
	別居(n=141)	44.5%
長子接触頻度	毎日(n=184)	58.0%
	週に数回(n=28)	8.8%
	週に1回(n=20)	6.3%
	月に1～数回(n=51)	16.1%
	年に数回以下(n=34)	10.7%

表2. 合成変数の平均値、標準偏差、 α 係数

合成変数	M	SD	α 係数
母親への見守り	3.91	0.69	.773
母親にサポートを与える	3.67	0.90	.872
母親にサポートを求める	3.24	1.13	.837
長子への見守り	4.02	0.61	.737
長子にサポートを与える	3.83	0.64	.606
長子にサポートを求める	3.75	0.79	.799

などの5要因それぞれを説明変数とする重回帰分析を行った。

5要因の説明変数の選定に当たっては、被験者本人の要因として年齢、職業の有無、学歴、母親の要因として母親年齢、介護の有無、配偶者有無、接触頻度、居住形態、また、長子の要因として、長子の性別、長子の未既婚、同別居の有無、接触頻度などを想定した。しかし、変数が多すぎることで、各要因間の相関が高いことを考慮し、主成分分析を行い、同じ成分に属するものをまとめ、その成分に最も寄与している変数をその成分の代表として選んだ結果として、以下の5要因長子の同別居、長子の性別、母親年齢、母親との接触頻度、母親の介護の有無が説明変数となった。主成分分析の結果については表3に記す。

1) 長子との親子関係の規定要因

中年期女性とその長子との親子関係の規定要因を調べるため、まず、5要因について値を次の様に設定した。まず、長子の同別居については、ダミー変数を用い、長子との同居、別居の2群に対して、同居を1、別居を0（同居していない）とした。長子の性別につ

いては、男子と女子の2群に対して、ダミー変数を用い、男子を1、女子を0（男子ではない）とした。母親との接触頻度については、「毎日」から「週1回」を接触頻度多群、「月1回」から「ほとんど会わない」を接触頻度少群の2群とし、接触頻度少群を1、接触頻度多群を2とした。母親の年齢については、65～79歳を年齢低群、80～99歳までを年齢高群の2群とし、年齢低群を1、年齢高群を2とした。母親の介護の有無については、介護有りとし、介護無しを0（介護が必要ではない）と分類した。

続いて、これらの5要因をそれぞれ説明変数、長子との関係に関する3変数を目的変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表4）。その結果、「長子への見守り」については、長子との同別居のみが有意に関連していた（ $p < .01$ ）。「長子にサポートを与える」については、長子の性別のみが有意に関連していた（ $p < .001$ ）。「長子にサポートを求める」については、長子との同別居のみが有意に関連していた（ $p < .001$ ）。

表3. 主成分分析の結果

	成分				
	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V
長子の同別居	.933	-.037	.008	-.016	-.041
長子交流頻度	.921	-.053	-.006	-.101	-.067
長子未既婚	.649	-.286	.000	.321	.134
母親年齢	-.182	.817	-.040	.106	-.106
被験者年齢	-.301	.710	.071	.012	-.021
被験者職業	-.150	.581	.164	.084	-.181
母親接触頻度	.039	.033	.861	.070	.044
母親同別居	-.037	-.120	.851	-.010	-.043
母親介護	-.077	.227	-.023	.714	-.183
被験者学歴	.145	-.263	.111	.649	.295
長子性別	-.031	.144	.033	.090	.838
母親配偶者	-.027	-.396	-.089	-.331	.501

表4. 中年期女性の親子関係に関する重回帰分析の結果

	目的変数	説明変数	調整済みR2乗	β 係数
長子	見守り	長子の同別居	0.020	-0.152**
	サポートを与える	長子の性別	0.036	-0.198***
	サポートを求める	長子の同別居	0.041	0.210***
母親	見守り	母親介護有無	0.011	-0.142*
	サポートを与える	母親接触頻度	0.051	0.232***
	サポートを求める	母親介護有無	0.042	-0.216***
		母親接触頻度	0.031	0.184**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

この結果は、長子の同別居と長子の性別など、長子の要因のみ有意な関連を示していたことから、長子に関わる要因のみが影響力を持つことを示していた。

2) 母親との親子関係の規定要因

中年期の女性とその母親との親子関係の規定要因を調べるため、長子との関係と同じ、5変数を説明変数、母親との関係に関する3変数を目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(表4)。その結果、「母親への見守り」については、母親の介護の有無のみが有意に関連していた($p < .05$)。「母親にサポートを与える」については、母親との接触頻度のみが有意な関連を示した($p < .001$)。「母親にサポートを求める」については、母親の介護の有無が最も説明力が大きく($p < .001$)、母親との接触頻度がそれに次いだ($p < .01$)。

考察

本研究では、子世代に対しても親世代に対しても、責任と役割が同時に要求されるサンドイッチ世代である中年期女性に焦点を当て、上下の2つの親子関係(母親との関係と長子との関係)を同時に検討し、その関係性における規定要因を明らかにすることを試みた。

その結果、長子との親子関係の規定要因としては、長子との同別居や長子の性別などが見出された。長子への見守り、長子にサポートを求めるには長子との同別居の有無が深く関連しており、同居しているほど、長子にサポートを求めやすいこと、別居しているほど間接的なサポートとして見守る態度を示しやすいことがわかった。この結果は、母と娘の居住近接性にかかわらず、娘が結婚し、子どもを持つことで援助交換のパターンが変化するというFischer(1981)の研究結果とは違って、同別居の有無による居住近接性が強く関連することを示していた。この結果は、長子の未婚率の高さと同居率の高さなどが影響しているのかもしれない。

また、長子にサポートを与えるには、長子の性別が強く関連しており、娘に対してより多くのサポートを与えるということが示された。この結果については、北村(2001)が示した結婚・出産というライフイベントを経た娘と母親の親密性の高さについて、結婚や出産というイベントが生じる以前においても、娘と母親の強い結びつきがあることを示唆するものである。母娘の紐帯は、娘の青年後期・成人期初期において既に存在し、結婚や出産によってより高められるものであ

ると考えられる。

母親との親子関係の規定要因としては、母親の介護有無や接触頻度などが示された。母への見守り、母親にサポートを求めるには、母親の介護の有無、すなわち、健康状態が深く関わっており、母親にサポートを与えたり、求めるには、母親との接触頻度が強く関連していることが見出された。この結果は、老母親は中年の娘との接触頻度が多いほど情緒的親密性を感じるという研究(Lawton, L., & Bengtson, V., 1994)や、老親子間の物理的な距離が近いほど、同伴行動や手段的サポートの授受が成り立ちやすい(横山・岡村, 1994)という研究などの結果と一致すると言えよう。また、母親の介護の状態が規定要因として示されたことについては、高齢期において、介護問題が大きな位置を占めることから、当然の結果とも言えるだろう。

また、本研究では、母親との関係については母親に関する人口統計学的要因が、長子との関係については長子に関する人口統計学的要因が、それぞれ影響力を持つという結果が示された。このことから、それぞれの親子関係は、それぞれの相手との関係の中でのみ構築されるものであり、人口統計学的要因に関する限り、2つの親子関係について世代間の影響は見られないことがわかる。従って、中年期女性をサンドイッチ世代の上下の2つの親子関係に対して3世代という世代間の関係性の関連が見られなく、別個の2つの親子関係が存在していることが示唆される。3世代という世代間の関係性についてより詳しい検討が必要であろう。

今後の課題

今回の調査では、中年期女性に焦点を当て、その母親や長子との関係に関する質問紙調査を行っているが、中年期の全般を理解するためには中年期男性を対象とした調査も求められる。また、母親に限らず、父親との関係も視野に入れた研究が望まれる。

文献

- Bergquist, W.H., Greenberg, E.M & Klaum, G.A. (1993). *In our fifties: Voices of men and women reinventing their lives*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Fischer, L.R. (1981). "Transitions in the Mother-Daughter Relationship," *Journal of Marriage and the Family*, 43.

- Furman, W. (1991). Parent-Child Relationship Questionnaire (PCRQ). In Perlmutter, B. F., Touliatos, J., Holden, G.W. (2001), *Handbook of FAMILY MEASUREMENT TECHNIQUES Instruments & Index* (pp285-289). Sage.
- 河合千恵子・下仲順子. (1992). 老年期におけるソーシャル・サポートの授受；別居家族との関係の検討. *老年社会学*, 14, 63-71.
- 河合千恵子・下仲順子. (1994). 老年期における家族関係—老人とその配偶者・子世代・孫世代の対人関係についての心理的アプローチ検討—. *社会老年学*, 31, 12-21.
- 北村琴美・無藤 隆. (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係—娘の結婚・出産というライフイベントに着目して—. *発達心理学研究*, 12, 46-57.
- 久和佐枝子・梁明玉 (印刷中). 中年期女性の親子関係—サンドイッチ世代における2つの親子関係のための尺度開発—. *子ども発達教育研究センター紀要*、第3号
- Lawton, L., Silverstein, M. & Bengtson, V., (1994). "Affection, social Contact, and Geographic Distance Between Adult Children and Their Parents," *Journal of Marriage and the Family*, 56.
- Levinson, D.J. (1986). A conception of adult development. *American Psychologist*, 41, 3-13.
- 岡本祐子. (1994b). 人生の正午—中年期. 岡本祐子・松下美知子 (編), *女性のためのライフサイクル心理学*. 福村. 177-200.
- 落合良行・佐藤有耕. (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. *教育心理学研究*, 44, 1, 11-22.
- Rossi, A.S. (1980). Aging and parenthood in the middle years. In P.B. Baltes & O.G. Brim, Jr. (Eds.), *Life-span development and behavior*, Vol. 3. New York: Academic Press. pp.137-205.
- Santork, J.W. (1985). *Adult development and aging*. Dubuque, IA: Wm. C. Brown.
- Schlesinger, B. (1989). 'The sandwich generation': Middle-aged families under stress. *Canada's Mental Health*, 37, 11-14.
- Silverberg, S.B. & Steinberg, L. (1987). Adolescent autonomy, parent-adolescent conflict, and parental well-being. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 293-312.
- Silverberg, S.B. & Steinberg, L. (1990). Psychological well-being of parents with early adolescent children. *Developmental Psychology*, 26, 658-666.
- 清水紀子. (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ. *発達心理学研究*, 15, 1, 52-64.
- 谷井・上地. (1993). 親役割診断尺度. 堀洋道監修, 吉田富二雄編 (2001), *心理測定尺度集II 人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観>* (pp153-158). 東京:サイエンス社.
- Troll, L. & Bengtson V. with the assistance of McFarland, D., (1979). "Generation in the Family," Burr, W.R. et al. eds, *Contemporary Theories about the Family Vol.1: Research-Based Theories*, The Free Press.
- Zal, H.Michael, (1992). *The sandwich Generation: Caught Between Growing Children and Parents*.
- 横山博子・岡村清子ほか. (1994). 老親と別居子関係：団地に居住する女性老人の場合. *老年社会科学* 15, 119-124.

【付記】

本稿は、お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生なら死までの人間発達科学」プロジェクトIV「中年女性の生活キャリアと危機的移行」による調査の一部である。